

20世紀初中期に刊行された辞典における漢語アクセントの基礎的分析

—奥村「漢語アクセント類別語彙」の検証のために—

Analysis of Sino-Japanese Pitch Accent in the Accent Dictionaries Published in the First Half of the 20 th Century : Assessing Okumura's Classification of Sino-Japanese Words by Pitch Accent

加藤 大鶴

KATO Daikaku

1 先行研究と本稿の目的

日本語アクセントの歴史的研究は、古く金田一春彦1937によって（1）比較言語学的手法と（2）文献学的手法との両輪を組み合わせたことがこの方面での基本的な方法とされ、今日に至るまで様々な成果を生み出してきた。しかしその主たる対象は漢語輸入以前から日本に存在していた和語であり、漢語や外来語などの借用語は歴史的研究の埒外に置かれる傾向にあった。とりわけ（1）の手法において借用語が馴染みにくいという本質的な問題が、その要因の一つである。一方、（2）の手法による漢語アクセント研究は、古くは桜井茂治1957、桜井茂治1959、桜井茂治1994、近年では上野和昭2011・加藤大鶴2018他があり、近畿中央方言における古代から近世までの史的变化が少しずつ分かるようになってきた。他方でそれを別の面から保証するはずの比較言語学的手法については基礎的なデータさえ十分に蓄積されておらず、この半世紀、研究の進展は必ずしもはかばかしいとは言えない状況にある。そのような中、奥村三雄による一連の研究（奥村三雄1961・1963・1974他）はこの方面の研究を進める上での数少ない重要な基盤と言って良いだろう。

方言間のアクセント型対応を見るためのデータセットとなる和語の語群を金田一の類別語彙と呼ぶが、それに相当するものとして奥村は漢語アクセント類別語彙を提案した。奥村は漢語類別語彙の設定にあたって京都・東京・鹿児島¹の3つの方言の比較している。しかしながら認定に用いた3つの方言アクセントが果たして妥当なものであるか検証は行われていない。例えば奥村が3拍名詞第5類（京都H1型・東京2型・鹿児島B型の対応を示す）相当であると認定している「世界」を、前掲論文が根拠としているアクセント記載辞書（後述）で確かめてみると、東京で1・2型の両様が認められることが分かる。方言間対応を考えるとときにいずれがふさわしい型なのか、ということは辞書だけでは本来決定できない。いずれは中輪東京式アクセントに属する甲府市方言など^{*1}のアクセントを参照することでいずれかの推定の確度を上げられるだろう。ともあれしかしそれはそれとして、まずは奥

村が直接に根拠とした複数の辞書記載にあたって漢語アクセントを確認し、整理することから始めるのが筋であろう。

さて、こうしたアクセント型の決定に際して、19世紀から20世紀にかけて東京語の漢語アクセントが変化しつつあったらしいことも、問題を複雑にしている。三井はるみ1986によれば、明治期から昭和期にかけて3拍漢語のアクセントをみると、2+1構造のものは1型へ1+2型構造のものは0型へ移行しつつあることが報告されている。塩田雄大2016で示される現代語の報告につながりうのようなア型全体の変化のなかで、比較言語学的な意味で対照可能な「東京式」*²の個別的なアクセントを特定していくことには困難が伴う。

こうした問題意識のもと、加藤大鶴2019では、奥村が東京式アクセントを決定するために用いたアクセント辞典を1字漢語に限って検証した。その結果、各辞書間でア型が揺れるものから代表型を決定するプロセスが不透明であり、改めてデータを検証する必要があることがわかった。以上のような状況に鑑み、本研究では、(1) 奥村が東京式アクセントにおける漢語のアクセントを指定するに際して用いた辞書をデータベース化し、拍数別・構造別にどのようなア型が表れるかを検証する。まず辞書間の揺れを記述し各辞書の傾向を明らかにした上で、(2) それが奥村のア型推定とどのように関わるかを考えたい。

2 5種の辞書資料

奥村三雄1974が掲げる漢語アクセントの一覧表が根拠としている資料は、奥村三雄1963にその詳細な記載がある。それらのうち、ある程度信頼に足る辞書類は次の通りである(山田美妙『日本大辞書』には信頼できない点がしばしば見られるためデータベースには含めなかった)。

- A 金田一春彦監修1958『明解日本語アクセント辞典』三省堂(本研究では初版第16刷(1971)を使用した)
- B 神保・常深1932『国語発音アクセント辞典』厚生閣(本研究では第19版(1943)を使用した)
- C 金田一京助1943『明解国語辞典』三省堂(奥村は1952年の改訂版を用いている。本研究では初版の復刻版である1997年版を使用した)
- D 日本放送協会編1943『日本語アクセント辞典』日本放送出版協会(初版を使用した)
- E 平山輝男1960『全国アクセント辞典』東京堂出版(第30版(2010)を使用した)

*1 「東京式アクセントの代表として、多くの諸方言の中で比較的古い姿を多く持っていると思われる山梨県甲府市方言」(金田一春彦1954)とある。東京式アクセントのうち標準語のベースとなった東京語のアクセントは独自の変化が多いことが知られる(相澤正夫1992・1996・佐藤亮一1990)。

*2 奥村の論にしたがって本稿でも東京のアクセントとして「東京式」という用語を用いる。したがって金田一がいう「内輪・中輪・外輪東京式」の「東京式」とはもちろん用法が異なる。本稿では東京方言の影響が濃厚に見られる辞書を対象としており、理屈としてはその実質は中輪東京式に近い姿であろうけれども、そのような厳密さで取り扱える性質のアクセントとは一応切り離して考えたい。

2.1 A 金田一春彦監修1958『明解日本語アクセント辞典』三省堂

本辞書のアクセントは秋永一枝が大部分を担っていることが序文等から知られるが、解説に「東京式アクセントは標準語アクセントとしてふさわしい」としながらも、後にA型の認定については東京旧市内のアクセントを重視したらしいことが示唆される(秋永一枝・坂本清恵2010: 2)。末尾の「アクセント習得法則」のなかには音節構造とアクセントの関係を論じた部分があり、本稿の分析でも特に無声化と関わる場所は参考にした。標準語アクセントと東京アクセントとを辞書にどう採録するかという問題は秋永一枝1985に記載がある。

データベースには1拍～3拍語のA型(合計10400データ)を採録した。

2.2 B 神保・常深1932『国語発音アクセント辞典』厚生閣

収載語数は約30000語という(三井はるみ1986)。編者の神保氏は明治16年東京下谷生まれ、常深氏は不明。「例言」に「純粹の東京の発音、即ち音韻とアクセントを表記したのであるが、なるべく多数の人々の、そしてなるべく種々の場合を聴取し総合して、最も公平正確ならんことを期した。(中略)本書は「生きた口語」の辞書といってもよい」とある。

データベースには辞書Aに採録された語と重複する語のA型(合計3894データ)を記載した。

2.3 C 金田一京助1943『明解国語辞典』三省堂

本辞書の監修者金田一京助によれば、その序にアクセントの記入は金田一春彦によるとある。辞書の冒頭部分には「標準語アクセントの解説」が付される。解説中、本辞書のアクセントは「東京に生まれ、東京に育ち、所謂標準語を話す人」によるとしつつも、東京市北部及び西部で育成した春彦自身と、その周囲の者で「純東京人」の発音を基本としながら、「先輩諸氏の結果」も参照したとする。A型のゆれが、春彦と周囲の者と「先輩諸氏」とで著しく異なる場合は、その他の東京人の発音や時に市内の小中学校の生徒を対象とした調査を通じて決定したという。

ある語のA型に揺れが認められる場合には、新旧に関わるもの、より一般的なものといった評価が下されている。その要点のみを以下に抜き出して記す。

1. 二種のアクセントの中、古くから東京に行はれてゐたと見られるものを先にあげ、比較的新しい時代に行はれるように成つたと見られるものは後にあげる。
2. 二種のアクセントの中、どっちが東京に本来あるものか断定し難いものは、暫く広く行はれてゐる方を先にあげる。
3. 二種のアクセントの中、一方が東京本来のものと考へられても、それを口にする人が非常に稀である場合は、暫く一般的である方を先にあげたものがある。
4. 三種以上のアクセントをもつものは、その中最も普通な型二種をとつて、(中略)他の型は総べて割愛した。

データベースには辞書 A に採録された語と重複する語のア型（合計8898データ）を記載した。

2.4 D 日本放送協会編1943『日本語アクセント辞典』日本放送出版協会

本辞書は放送アクセントを記したものとして「所定の「放送用語の調査に関する一般方針」の示すところに従ひ、東京アクセントの最も標準的なものを採用すること、なつてゐるが、その選定に当たっては、学問的にも実際的にも種々の困難が伏在してゐるといふことを率直に認めなければならない」（例言）とする。アクセントの選定には岡倉由三郎、神保格、新村出、土岐善麿、保科孝一他が関わったとされる。金田一春彦1973によれば、ア型に揺れがある場合は機械的に0型を先に掲げる不備があったとのことである。本稿の分析において、辞書 D に0型優位が多くなってしまっているのは、この編集方針によるものと考えられる。収録語数は約45000語と目される。

アクセント表示は語の上に線を引く方法で、版によると思われるが所々印刷が悪くかすれて見にくい部分があり、データ化するにあたって認定が困難である場合もあった。

データベースには辞書 A に採録された語と重複する語のア型（合計7575データ）を記載した。

2.5 E 平山輝男1960『全国アクセント辞典』東京堂出版

東京アクセント・京都アクセント・鹿児島アクセントを記載し、方言間のア型対応を対照できる辞書である。「はじめに」によればア型の決定には「過去に集めた資料のほかに、将来の日本を背負う若い世代の20才代～30才代の青年男女の発音を中心」としており、ここに辞書 A～D と異なる性質が示唆される。もっとも、東京アクセントについては「生粋の東京っ子（山手・下町）」100余名の発音を基本としながら、10才代や老年層の発音も参考にしたという。

データベースには辞書 A に採録された語と重複する語のア型（合計6191データ）を記載した。

3 データ化の方法

まず、データ化に際して、最も収録語数の多い辞書 A を底本とし、1拍～3拍の全ての漢語とそのア型を入力した。次に、辞書 A に記載される語を対象として、辞書 B～E に記載されるア型を記入した。したがって辞書 B～E に記載がある語であっても、辞書 A になければ本データベースには収録されていない。

入力作業は、稿者が A 『明解日本語アクセント辞典』を、アルバイトの学生が辞書 B-E を分担入力した。データ項目が大部であるため、次のような手順で作業を進めた。

1. 各辞書をコピーし（1）ア～カ行、（2）サ～ナ行、（3）ハ～ワ行の3部に分ける。
2. コピーを用いて各アルバイトが電子ファイルにア型を入力する。
3. 入力後、入力者とは異なるチェッカーが全ての項目について入力ミスがないか確かめた。
4. 入力作業は Google Spreadsheet 上で行い各入力者が相互に入力状況を参照できるようにし、

入力に迷う例は稿者にオンラインでその都度尋ねることで、作業の円滑化と入力方針のぶれを最小限に抑えるよう努めた。

入力した項目は、語形（カタカナ表記）、漢字表記、各辞書のA型と備考である。これらを入力した後、漢字字数、語の拍数、語の拍構造（1拍+2拍など）、音節構造（特殊拍の出現位置など）を入力し、分析に備えた。A型の記載は、平板型=0、頭高型=1などとする他、下がり目の位置によって2型・3型などとした。また、辞書Aでは、語形・漢字表記が同じでも意味や文法機能によって項目を別に立てるものがある。データ化に際してそれらを統合することはしていないが、辞書B-Eが意味や文法機能などの詳細な情報を記載することが少ないため、そこに示されるA型がどちらに該当するのか判断できなかつたものもある。データを利用する際には、両方の項目をみておく必要がある。

なお本データは再校訂の後、WEB上に公開する予定である。

4 各辞書間におけるアクセント型の揺れ

各辞書に記載されるA型の数的分布傾向を手がかりに、概ねの特徴を見ておく。A型の揺れについては、全ての出現型を表に記載すると冗長になるため、併記されるA型のうち先頭のものでまとめ、「0型優位」「1型優位」などと記載した。

各表の最上段に辞書Aに現われるA型の総数を記し、その下に辞書B～Eの数を記入した。最下段には各辞書のA型の合計数を示してある。表中、網掛けの部分は辞書Aと各辞書のA型が対応する数である。

4.1 1拍の漢語

	0型 A=31				1型 A=109				0型優位 A=8				1型優位 A=10			
	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E
0型	20	19	25	21	2		6	1	2	1	6	1	7			5
1型	1	4	1	1	35	97	60	55	4	4		1	2	7	1	4
0型優位	1	6	1			1	2		2	2			2		5	
1型優位		1							1		2		3	3	4	
計	22	30	27	22	37	98	68	56	6	8	8	4	9	12	12	8

表1 1拍の漢語A型・5辞書対照表

1拍の漢語で最も多いA型は、1型（全体の6～7割程度）である。辞書Aを分析した加藤大鶴2019でも確認したように、1拍漢語は1型の力が強く、方言間対応を元に考えれば本来は他の型であったものが1型に流入していることも推測される。例えば、表7に示した「威・意・理」などは辞書Aでは1型優位（0型とのあいだで揺れる）だが、対応上は0型が古形と考えられる。これらのうち

「威」「意」は辞書Bで1型を記載するが、「理」は辞書BとDで0型を記載するなど一定しない面がある。三井はるみ1986で述べられる馴染み度との関連などが想定されようか。

4.2 2拍の漢語

■ 1字2拍の漢語 1型が優位であることは2拍漢語でも変わりがない(7~8割)。これも先行研究が示すように、基本的には1型には0型や2型からの流入が推測される。辞書Aで1型優位としたもののうち、0型との間で揺れる13例「悦・爛・頑・香・曲・金・銀・昨・詮・宙・貂・倍・別」は他辞書で多くが1型、「貂・別」は2型で現われる。2型との間で揺れる7例「角・酷・策・柵・雜・塾・述」も他辞書で概ね1型で現われる。こうした流れに対して、例外も見受けられる。辞書Aでは「席」「僕」を「1, 新0」としており、古形が0型であるとは認めていない。奥村は「席」の東京式アクセントを0型と認定しているが、本稿の分析とは合致しない。

辞書Aで1型のうち、辞書B・Dで0型を取るものが若干多い。辞書Bでは「玉・駿・効・衝・定・節・僧・俗・卓・鐸・調・珍・亭・同・龍」、辞書Dでは「愛・会・額・活・空・駿・功・効・笏・弱・俗・中・禄」がある。これらのうち、奥村は「愛・会」を1型、「額・俗」を0型として伝統型に位置づけているが、辞書データからそのように認定することにはためらいを伴う。

また、0型と1型における辞書Aとそれ以外の辞書の揺れをみると、それなりの数が見て取れる

	0型 A=72				1型 A=605				2型 A=47			
	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E
0型	50	47	58	52	12	4	16	1	2	1		
1型	2	16	2	5	272	533	372	289		1		
2型		2	1	2	1				31	39	36	35
0型優位		4		1	6	2	2					
1型優位		1			1	7	2	2				1
2型優位								1		2		1
計	52	70	61	60	292	546	392	293	33	43	36	37

	0型優位 A=16				1型優位 A=22				2型優位 A=4			
	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E
0型	9		9		2	2	3	1			2	
1型		6	1		9	7	8	5				
2型		1				1	1		3	2	2	
0型優位	1	4	4	5	1	2	2	1		1		1
1型優位	1			2		5	3	5				
2型優位		2		2		4		2		1		1
計	11	13	14	9	12	21	17	14	3	4	4	2

表2 1字2拍の漢語A型・5辞書対照表

のに対して、2型については揺れが少ない。この型に含まれている語の音構造をみるとその全てが、入声音由来の -ki・ku、-ti・tu (「識・軸」^{シキ シク}、「七・失」^{シチ シツ}) であることが分かる。-N (撥音)・-R (引音) のような音構造を持つ語の場合は、末拍の高さを担えず1型に動いたのに対して、2型は元の形を保ったのだろう。辞書Aでは1型であるが、辞書Cでは2型を含んで揺れて現われるものがわずかにあり、「悪」^{アク} (辞書Bでは2型のみ) 「活・杓・笏・略」^{カツ シヤク シヤク リヤク} が該当する。

	0型 A=46				1型 A=777				2型 A=40			
	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E
0型	27	31	36	27	5	2	14		3		2	
1型	1	1	1	1	269	636	514	410			1	
2型		1		1	4	10	12		20	35	26	19
0型優位		7		2	1	14	6					
1型優位		1			1	7	2	4				1
2型優位		3										3
計	28	44	37	31	280	669	548	414	23	35	29	23

	0型優位 A=29				1型優位 A=50				2型優位 A=82			
	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E
0型	8	6	17	2	1	4	7		3	1	4	
1型	7	12	3	1	10	16	11	1	1	1	3	1
2型	1		2		1	20	10		11	65	44	3
0型優位	1	10	2	4		4	3			2		
1型優位				10		5	5	12	3	1	1	26
2型優位				1			1			6	1	11
計	17	28	24	18	12	49	37	13	18	76	53	41

表3 2字2拍の漢語A型・5辞書対照表

■ 2字2拍の漢語 全体として1型が最も多いことは1字2拍のものと変わらないが、辞書Aで1型、他辞書で2型のふるまいがやや異なる。1字2拍では他辞書で2型はほぼ現われないのに対し、2字2拍ではやや2型が目立つ。これらの多くは辞書Aの記載によれば、本来は1型であったが第1拍が母音の無声化によって高さを担えず、高さを後ろの拍に送ったために2型になったものである。辞書Bは4例中3例、辞書Cは10例中6例、辞書Dは12例中7例がそれに該当する (「嬉嬉・危機・鬼気・既記・起訴・基礎」など)。辞書Aで2型優位としたものも、82例中73例が無声化が関与して2型と1型で揺れるケースであり、辞書C・Dの2型のほぼ全てが無声化によって後ろにずれたものを記載している。1型優位にも同様の傾向が見られ、1型と2型に数が多く確かめられる。

辞書Aで2型優位のものを見ると、辞書Eが似た傾向であることが見て取れる。うち8語は0型との間で揺れるものである (「機会・器官・期間・貴賤・苦戦・懸想・胡弓・死刑」^{キカイ キガン キカン キセン クセン ケンウ コキョウ シケイ})。これらのほと

んどは辞書 B・C では 2 型を単独で記載しており、辞書 A・E は 0 型への類推変化を起こした新しい型を採録したと考えられよう。

こうした点で 2 字 2 拍の 2 型が現われる経緯は、入声字由来である 1 字 2 拍の 2 型とは事情を大きく異にしていると言えよう。

また 2 拍（1 字・2 字のもの共に）で 2 型の漢語について言えば、他の型に比べて辞書間の揺れが少なく、安定した現れ方をすることが分かる。京阪式アクセントと対応の良い東京式アクセントの伝統型を措定するにあたって、2 型の信頼度は相対的に高いと言えるだろう。

1 字 2 拍の漢語で、方言間対応や原音声調から伝統的 A 型が 2 型であると推定されるもののうち、第 2 拍が特殊拍であるものは 1 型に流入したと考えられる（奥村三雄 1974・加藤大鶴 2019）。そのように考えれば、2 字 2 拍より 1 字 2 拍のほうに 1 型の割合は高くなるとも考えられるが、共に 7～8 割であって違いがない。全体として音韻変化よりも類推変化の力が強く働いていると推測される。この点は別稿で検討したい。

なお辞書 A で 1 型のうち、辞書 D で 0 型となる語が若干多い（「^ギ戯画・^{キラ}綺羅・^{コシ}枯死・^{ジゴ}耳語・^{ジシュ}自主・^{シシヨ}四書・^{シュビ}首尾・^{ソフ}粗布・^{ヒゴ}卑語・^{ビシユ}美酒・^{フリヨ}不慮・^{マフ}麻布・^{リキ}利器・^{ワシ}和紙）。これらの 14 語は他の辞書ではすべて 1 型となっており、辞書 D だけが異なる A 型を記載する。

4.3 3 拍の漢語

19～20 世紀にかけての 3 拍漢語のアクセントがどのように変化したかについては三井はるみ 1986 に詳細な報告があるが、その要点は次の 4 つにまとめられる。

1. 拍構造が 1 + 2 の語は 0 型、2 + 1 の語は 1 型が各々優位である、
2. 拍構造が 1 + 2 の語は 1 型から 0 型に、2 + 1 の語は 0 型から 1 型に、各々変化する傾向にある
3. 明治以降にできた新語には 1 型から 0 型に変化した語が多く、そのアクセント変化は明治期の早い段階で生じたと考えられる
4. 例外的な変化をしたものには、一般的な変化をした語に比べて使用頻度の高い語が多い本稿の分析でも、辞書 A～E のいずれも 1 点目を確認することができた。東京式アクセントにおける伝統型を推定するには、2・3 点目の変化を経る前の姿を考える必要がある。下記、1 + 2 構造と 2 + 1 構造の順に分析結果を掲げた。

■ 2 字 3 拍 1 + 2 構造の漢語 全体として最も多いのは、先行研究が示すとおり 0 型である（6～7 割）。続いて 1 型（1～2 割）、2 型、3 型と続く。

辞書 A で 0 型である語のうち、辞書 B・C で 1 型となる場合がやや多い。辞書 B の 70 語のうち、他辞書で 0 型・0 型優位となるものは 50 語だった。辞書 C の 113 語のうち、他辞書で 0 型・0 型優位となるものは 44 語だった。それらに共通する語は「^{キイン}起因・^{キヨウ}器用・^{シヨウ}子葉・^{チジク}地軸」のわずか 4 語のみであ

	0型 A=2742				1型 A=578				2型 A=125				3型 A=9				
	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E	
0型	799	1988	1873	1663	6	8	24	13	5		7	1					1
1型	70	113	26	3	291	484	408	337	1		1	2					
2型	3	11	16	2	1				49	83	73	61				1	
3型		1	1		3												
0型優位	6	138	19	16			13	3			4	3			5	4	5
1型優位	4	108		2			17	2	13		1	4					
2型優位		22		1	1	2				4		6					
3型優位			1														
計	882	2381	1936	1687	302	511	447	366	55	88	85	77	5	4	6	5	

	0型優位 A=275				1型優位 A=223				2型優位 A=52				3型優位 A=3				
	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E	
0型	44	54	124	47	20	12	49	8	6	4	6						1
1型	42	94	29	1	69	123	82	11		1							
2型	3	9	4		4	2	5		14	29	21						
3型	1		1												1		3
0型優位	4	22	71	118	4	2	29	50			9						1
1型優位	2	58		14	4	64	27	79		2	2	4			1		
2型優位		9		3	1	2		1	1		13						
3型優位		2													1	1	
計	96	248	229	183	102	205	192	149	21	36	38	17	2	2	3	2	

表4 2字3拍 1+2構造の漢語A型・5辞書対照表

る。とすれば辞書BCが全体として古い1型を記載し辞書Aが多数型への類推の結果を記載している、という見方をするのは難しく、1型と0型の間の揺れが各辞書に記載された、と見ておくのが穏当であろう。

他辞書で0型、辞書Bでのみ1型となる50語は次の通りである。

イガイ イカン イジン イタン イブツ オンワ カメン キジュン キジュン キジョウ クフウ コスイ コドク シ
 遺骸・遺憾・偉人・異端・遺物・温和・仮面・帰順・基準・机上・工夫・鼓吹・孤独・次
 ダイ シブツ シベン ジマク シモン シヤダン シュエン シュショウ ショザイ ショチュウ ジョメイ ジリキ スイジ セイシュ
 第・死物・支弁・字幕・諮問・遮断・酒宴・主将・所在・暑中・除名・自力・炊事・清酒・
 セ ジョウ ソコウ ソボク ダンワ チジョウ チンカ テンカ トテイ トライ ハケン ヒゾウ ヒンシ フゴウ フ
 世上・素行・素朴・談話・地上・鎮火・点火・徒弟・渡来・覇権・秘蔵・品詞・富豪・付
 ズイ フゼン フミン フンカ ヘイワ ベンビ ホウカ ホドウ ユライ ヨネン
 随・不善・不眠・噴火・平和・便秘・放火・歩道・由来・余念

他辞書で0型、辞書Cでのみ1型となる44語は次の通りである。

イエキ イギョウ カカイ ガコウ カコン カセイ ガダン カチュウ カチョウ カホウ キイン キオウ キキヤク キ
 胃液・異郷・歌会・画工・禍根・歌聖・画壇・渦中・家長・加俸・起因・既往・棄却・奇
 グウ ギセキ キゼツ キテン キテン ギネン キハン キラク グミン ジケイ シン シン シセキ シダン シャ
 遇・議席・気絶・起点・疑念・疑範・気楽・愚民・次兄・使臣・指針・齒石・指弾・斜
 セン シュハイ シュエン ジュレイ ショウク ジレイ シレツ シロン ソカイ ソセキ ダリョク チジク フゲン フモウ
 線・酒杯・主文・樹齡・曙光・事例・熾烈・史論・租界・礎石・惰力・地軸・付言・不毛・
 ムサイ ムテキ リレキ
 無才・霧笛・履歴

また辞書Aで1型のうち、辞書Dで0型が24語とやや多い。同様の傾向は2字2拍の場合にも認められた。

3型は数が少ないが、全て第2字が入声由来であった(「^{シカク}四角・^{ジゴク}地獄・^{ニガツ}二月・^{ニシヤク}二尺・^{ニシヤク}二勺・^{ニヒヤク}二百」)。

辞書Aで0型優位、1型優位、2型優位は各々他辞書で0型、1型、2型の単独記載となる傾向が認められる。変化の方向性については個別的看着ていく必要がある。

	0型 A=795				1型 A=2615				2型 A=60				3型 A=32			
	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E
0型	311	559	586	509	31	37	118	10	1		3		3	2	1	6
1型	21	60	20	8	802	2149	1737	1398								
2型		2			2		2		15	42	38	30				
3型	1	1		2		1	3						21	19	22	12
0型優位	3	17	8	9	3	2	16	4			1					1
1型優位		24		4	5	47	3	10				2				
2型優位		4				6			1		2					
3型優位		6				1		1		6				6		3
計	336	673	614	532	843	2243	1879	1423	17	48	44	32	24	27	23	22

	0型優位 A=227				1型優位 A=299				2型優位 A=16				3型優位 A=24			
	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E	B	C	D	E
0型	57	61	109	14	34	17	64	5	3	2	1		5		1	3
1型	24	57	38	8	73	141	109	34	1		1		4		3	1
2型	2	2			9		6	1	6	4	6	1		1		1
3型		5	1	1	4	3	1						8	5	11	
0型優位	4	9	37	82	2	2	52	27			1	2	1		3	5
1型優位	2	47		40	3	91	29	142		1	1	3		1	5	3
2型優位		3				9	1			8	1	5				1
3型優位		8	1	1		10	1	1					2	15		4
計	89	192	184	146	125	273	263	210	10	15	11	11	20	22	23	18

表5 2字3拍 2+1構造の漢語A型・5辞書対照表

■2字3拍 2+1構造の漢語 全体として最も多いのは、先行研究が示すとおり1型である（6～7割）。続いて0型（1～2割）、2型、3型と続く。

辞書Aで0型である語のうち、辞書Cで1型がやや多いこと、および辞書Aで1型のうち、辞書Dで0型が119語とやや多いのは1+2構造と同様である。こうした特徴は、辞書の個別的な傾向と考える事ができそうである。

辞書Aで2型の語は、第1字が全て入声由来であった。1+2構造や1字2拍構造と同様に、構成要素に入声由来の字音形態素が含まれる場合は、前部要素末尾の下がり目を強く保存するようで、A型の揺れが相対的に少ない。

一^{イチウ}字（以下「一」を前部要素に持つ語20）^{キチジ}・吉事・^{シキシャ}識者・^{シキノ}色素・^{シキブ}式部・^{シキマ}色魔・^{シチジ}七時・^{シチド}七度・^{シツ}失
^イ意・^{シツギ}質疑・^{シツド}湿度・^{シツム}執務・^{シユクア}宿痾・^{シユクイ}祝意・^{シユクシ}宿志・^{シユクシャ}宿舎・^{シユクシュ}宿主・^{シユクショ}宿所・^{シユクジョ}淑女・^{シユツギョ}出御・^{シユツ}出
^リ離・^{チクジ}逐次・^{チクシャ}畜舎・^{チツジョ}秩序・^{ハチジ}八時・^{ハチド}八度・^{ハチブ}八分・^{ヒヤクド}百度・^{ヒヤクミ}百味・^{ヒヤクリ}百里・^{フクイ}復位・^{フクガ}伏臥・^{フクシ}福祉・^{フク}福
^{チャ}茶・^{フクブ}腹部・^{フクリ}複利・^{フクリ}福利・^{ロクジ}六時・^{ロクド}六度・^{ロクブ}六部

辞書Aで0型優位、1型優位、2型優位は各々他辞書で0型、1型、2型の単独記載となる傾向が認められることも、1+2構造と同じである。揺れを伴うA型がどのような型に収斂するか、また

音節構造が収斂にどのように関与するかは稿を改めて考えたい。

5 奥村による漢語類別語彙の東京式アクセントからの検討

奥村が漢語類別語彙を指定する際に用いた、東京式アクセントの根拠となる5つの辞書について、その概要を見てきた。漢語のA型を拍数別・拍構造に見ると、先行研究から知られる傾向が確認できたが、個別に見れば各辞書の内部にも辞書同士の間にもA型の揺れが無視できない割合で存在していることも分かった。また各辞書にのみ現われる合理的説明の付かないA型上の個別的な性格というもの、部分的に観察された。こうした事実は、漢語が基本的には学習音＝知識音であって、馴染みの少ない語を多く含むことによると考えられる。

しかし奥村三雄1974では「耳新しい漢語や外来語（西洋語の他唐音語の類も）などのアクセントが、いわゆる基本型に集中するのに対し、由緒深い漢語の多くは、和語アクセントと同様の方言的対応を示す」として和語相当の漢語類別語彙を設定したのだった。

いまその類別と祖語の推定A型、京都式・東京式・鹿児島式の各方言アクセントの対応関係を、奥村にしたがって表6に掲げる。表中、3拍語の第5類と第6類とに2種類を区別するのは、東京式アクセントの違いを重視したためという。これらはいわゆる現代東京アクセントとその「出自形」に対応している。1拍語第2類、2拍語第5類、3拍語2・3類は対応関係が複雑なため奥村も類別を立てていない。

「祖語」の欄に示したのは奥村が「中古期末」のA型として推定するものである。全国の方言アクセントから推論される祖語の時代については奥村の研究以後も議論があるが、いまは奥村の記述に従っておく。なお方言間の対応が見られるからといって表7に掲げる全ての語が中古期末以前に使用を遡るかといった検討は別に必要であろう。金田一春彦1980では方言間対応が認められないとする「茶」を前部要素とする「茶碗」（3M6b）や、漢語由来でない可能性のある「昆布」（3M7）などが入っていることなども一考を要する。

奥村はこの類別語彙集を作成するにあたって、東京式アクセントの認定に苦勞したようである。そのことは第5類と第6類に2類を分けていることからも見取れるが、音節構造の特徴から高さが見られる現象について次のように述べていることから分かる。

東京語の場合、撥音促音長音や母音無声化拍などの不完全拍に、アクセント核が保たれないという様な事情もあって難しい。三拍語^{シホウ}四方類の世界・彼岸^{セカイ}などについては、《もともと地獄類^{ジゴク}に所属すべきもの乍ら、第三拍が不完全拍である為、東京アクセントにおける3型が保たれず、結果としてコ12b型になった》という様な考方もできそうなのである。或意味ではむしろ、地獄類^{ジゴク}に所属させるべきかもしれない。

類別の検証のためには東京式アクセントの根拠となっている辞書類の検討から始める必要がある、と本稿が考える所以である。

類別	語例	祖語	京都式	東京式	鹿児島式	語数
1 拍語第 1 類 (1M1)	気 <small>キ</small>	HH	H0	0	A	21
1 拍語第 3 類 (1M3)	絵 <small>エ</small>	LL	L0	1	B	9
2 拍語第 1 類 (2M1)	敵 <small>テキ</small>	HH	H0	0	A	43
2 拍語第 2 類 (2M2)	智恵 <small>チエ</small>	HL	H1	2	A	5
2 拍語第 3 類 (2M3)	毒 <small>ドク</small>	LL	H1	2	B	37
2 拍語第 4 類 (2M4)	千 <small>セン</small>	LH	L0	1	B	37
3 拍語第 1 類 (3M1)	眉間 <small>ミケン</small>	HHH	H0	0	A	38
3 拍語第 4 類 (3M4)	地獄 <small>ジゴク</small>	LLL	H1	3	B	23
3 拍語第 5a 類 (3M5a)	四方 <small>シホウ</small>	LLH	H1	2	B	19
3 拍語第 5b 類 (3M5b)	柘榴 <small>ザクロ</small>	LLH	H1	1	B	30
3 拍語第 6a 類 (3M6a)	菖蒲 <small>ショウブ</small>	LHH	L0	1	B	19
3 拍語第 6b 類 (3M6b)	太鼓 <small>タイコ</small>	LHH	L0	0	B	14
3 拍語第 7 類 (3M7)	最後 <small>サイゴ</small>	LHL	L2	1	B	35

表 6 漢語アクセントの類別 対応表

さて、以下では奥村三雄1974が「漢語アクセント型類別語彙表」として掲げる語彙について、奥村が東京式アクセントを推定する上で根拠とした5種の辞書に基づき、A型を対照表の形で掲げる。なお、「,」による区切りは辞書でそのように記載したもの、「/」による区切りは辞書では別に立項していたが本表ではまとめて配列したものを示す。

表 7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
1M1	イ	胃	0	0	0	0	0	
1M1	イ	意	1,0	1	1	0	1,0	
1M1	イ	威	1,0		1	0	1,0	
1M1	ガ	我	0	0	0,1	0	0	㊤～が強い
1M1	キ	気	0	0	1,0	0	0	㊤～は心,～に入る,～を回す,～の抜けたビール
1M1	ギ	義	0,1	1	0,1	0	1,0	
1M1	ギ	儀	0,1	0	1	0		
1M1	ク	九	1, 古0	0	1,0	0,1	1	
1M1	グ	愚	0,1	0	0	0	1,0	㊤代名詞 1㊤～な0,～思へらく1
1M1	ゴ	五	1, 古0	0	1,0	0,1	1	

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
1M1	シ	詩	0	0	0	0	0	
1M1	シャ	紗	0	0	0	1	0	
1M1	ショ	書	0/1	1	0,1/1	0/1	0/1	㊤文字・筆跡 0, 書物手紙 1㊤筆跡 0, 書籍 1㊤書道・文字 0, 書籍 1
1M1	ズ	頭	0		0,1	0	0	㊤～が高い
1M1	ヒ	碑	0	0	0	0	0	
1M1	マ	魔	0		1,0	0	0	
1M1	リ	利	1,0	0	0,1	0	0	
1M1	リ	理	1,0	0	0,1/1	0	1,0	㊤法則/きめ
1M1	ロ	櫓	0	0	0	0	0	
1M1	ロ	爐	0	0	0	0	0	
1M1	ロ	艘			0	0	0	
1M3	エ	画（絵）	1	1	1	1	1	
1M3	ク	苦	1	1	1	1	1	
1M3	ケ	気	0,1	1	1	0,1		
1M3	ザ	座	0,1		1,0	0,1	1	㊤坐は0㊤坐は1
1M3	シ	四	1	1	1	1	1	
1M3	ジ	字	1	1	1	1	1	
1M3	ジ	地	1	1	1	1	1	
1M3	ニ	二	1	1	1	1	1	
1M3	ヨ	餘	1	1	1	0,1		㊤代名詞, 我㊤代名詞, あまり
2M1	エキ	易	0	0	0	0	1	
2M1	エキ	益	0,1	0	0,1	0	1	
2M1	カク	格		1	0,2	0	0	㊤～がちがふ
2M1	キャク	客	0	0	0	0	0	
2M1	キュウ	灸	0	0	0	0	0	
2M1	キュウ	急	0	0	0	1	0	㊤～に
2M1	キョウ	興	0	0	0		0	㊤～に乗る
2M1	キョク	曲	0/1,0	0,1	1,0	0/0,1	1,0	㊤面白み・～がない 0, 楽曲 1,0㊤～がない 0, 音 0,1㊤音楽 1, 面白み・～がない 0

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
2M1	コツ	骨	0,2	0,2	0	0,2	0,2	㊤要領・呼吸・～ が分かる 0, 骨 2㊤骨法 0, 骨 2㊤呼吸 0, 骨 2㊤要領 0, 骨 2
2M1	サン	三	0	0	0	0	0	
2M1	サン	産	0	0	1	0	1	㊤出産
2M1	ジキ	直	0	0	0	0	0	㊤～に
2M1	ジュン	順	0	0	1	0	0	㊤～に㊤～に
2M1	シヨク	食	0	0	0,1	0	0	㊤～が進む,～が 細い
2M1	セキ	席	1, 新 0	1	1,2	1	1,0	
2M1	セツ	説	0,1	0	2,0	0	1,0	
2M1	ゼン	膳	0	0	0	0	0	㊤オゼン
2M1	ゾク	賊	0	0	0	0	0	㊤～が入った
2M1	ゾク	俗	0	0	1	0	0	㊤俗人,～だ・な・ に㊤～な
2M1	タク	宅	0	0	0	0	0	
2M1	チュウ	註	0	0	1	0	0	㊤～を入れる
2M1	ツイ	対	0	0	0	0	0	㊤～になる㊤～ になる
2M1	テキ	敵	0	0	0	0	0	
2M1	テン	点	0	0	0	0	0	
2M1	トク	得	0	0	0	0	0	
2M1	トク	徳	0	0	0	0	0	
2M1	バン	晩	0	0	0	0	0	
2M1	ヒョウ	表	0	0	0	0	0	
2M1	ヒョウ	票	0				0	
2M1	ヒョウ	評	0	0	0	0	0	
2M1	ヘン	辺	0	0	1	0	0	㊤ほとり・程度, 形式名詞も㊤こ の～㊤幾何
2M1	ヘン	偏		0	0	0	0	㊤漢字の～
2M1	ホウ	報	0,1	0	1	0	0,1	
2M1	ホウ	法	0	0	0	0	0	
2M1	ボウ	棒	0	0	0	0	0	
2M1	ボン	盆	0/1	0/1	1	0/1	0/1	㊤器具 0, うら盆 1㊤盆 0, 孟蘭盆 1㊤盆 0, 孟蘭盆 1
2M1	リク	陸	0, 新 2	0	0,2	0	0,2	

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
2M1	レイ	礼	0/1	0/1	0/1	0/1	0/1	㊤謝礼 0, 敬礼・礼儀・儀式 1㊦謝礼 0, 敬礼 1㊧贈物 0, 礼儀 1㊨謝礼 0, 敬礼 1㊩謝礼 0, 敬礼 1
2M1	ロク	碌	0	0	0	0	0	㊤～な事はない, ～に㊦ロクナ㊧ろくに㊨〔平ら〕
2M1	ワン	腕	0	0	0	0	0	
2M1	シュロ	棕櫚	0	0	0	0	0	
2M1	ブジ	無事	0	0	0	0	0	
2M2	イジ	意地	2	2	2	2	2	
2M2	イミ	意味	1	1,2	1	1	1	㊤～深長
2M2	ギリ	義理	2	2	2	2	2	
2M2	チエ	智慧	2	2	2	2	2	
2M2	ヨソ	余所	2	2	2	2	2,1	㊤～の人㊨～の
2M3	アク	悪	1	2	1,2	1,2	1	
2M3	カク	角	2/1,2/2,0	2	2/2,1/2	2/0	1,2	㊤かど・四角 2, 数学 1,2, 将棋 2,0㊧すみ・かど 2, 数 2,1, 将棋 2㊨将棋 0
2M3	カツ	活	1	0	1	0	1	㊧生きていること 1, 気絶した人を生かす術 0,2㊨～を入れる
2M3	キク	菊	2	2	2	2	2	
2M3	キチ	吉	2	2	2	2	2	㊤⇔凶
2M3	サク	柵	1,2	1	2,1	1	2,1	
2M3	サク	策	1,2	1	2,1	1	1	
2M3	シキ	式	2	2	2	2	2	
2M3	ジク	軸	2	2	2,0	2	2	
2M3	シチ	質	2	2	2	2	2	
2M3	ジツ	実	2	2	2	2	2	
2M3	シャク	尺	2	0	2	2	2	㊨～が足りない
2M3	ジュク	塾	1,2	1	2,1	1,2	1,2	
2M3	ジュツ	術	2	2	2	2	2,1	
2M3	チツ	膾	2		2		2	
2M3	チツ	帙	2		2		2	
2M3	ドク	毒	2	2	2	2	2	

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
2M3	ニク	肉	2	2	2	2	2	
2M3	ネツ	熱	2	2	2	2	2	
2M3	ハチ	鉢	2	2	2	2	2	
2M3	バチ	罰	2	2	2	2	2	
2M3	バチ	撥・枹	2		2	2	2	
2M3	フク	副	2	2	2	2	2	
2M3	フク	服	2	2		2	2	
2M3	フク	福	2	2	2	2	2	
2M3	フク	複	2		2		2	
2M3	マク	幕	2	2	2	2	2	
2M3	マク	膜	2	2	2	2	2	
2M3	ミャク	脈	2	2	2,0	2	2	㊤～がある
2M3	ヤク	厄	2	2	2	2	2	
2M3	ヨク	欲・慾	2	2	2	2	2	
2M3	ラク	楽	2	2	2	2	2	㊤～をやるに、 〔千秋樂〕㊥千秋 樂は1
2M3	ワク	篋・梓	2	2	2	2	2	
2M3	ガキ	餓鬼	2	0	2	2	2	
2M3	ジュズ	数珠	2	2	2	2	2	
2M3	デシ	弟子	2	2	2	2	2	
2M3	ニド	二度	2	2	2		2	㊤名詞的、二遍、 ～に読む、～とし ない㊥副詞は0、 温度は1
2M4	アイ	愛	1	0	1	1	1	
2M4	ウン	運	1	1	1	1	1	
2M4	エン	縁	1	1	1	1	1	
2M4	オウ	王	1	1	1	1	1	
2M4	オン	恩	1	1	1	1	1	
2M4	カイ	会	1	1	1	1	1	
2M4	ガイ	害	1	1	1	1	1	
2M4	ガン	癌	1	1	1	1	1	
2M4	ゲイ	藝	1	1	1	1	1	
2M4	ケン	劍	1	1	1	1	1	
2M4	コウ	香	1	1	1	1	1	
2M4	シン	心	1	1	1		1	
2M4	シン	新	1			1	1	
2M4	ジン	陣	1	1	1	1	1	
2M4	セン	先	1	1	1	1	1	㊤～に、～を越す
2M4	セン	千	1	1	1	1	1	㊤～に切る

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
2M4	ダイ	代	1/0	0	0	1/0	1	㊤世代・治世・代人 1, 代金 0 ㊤代金 ㊤世代 1, 代金 0
2M4	ダイ	台	1	1	1	1	1	
2M4	ダイ	題	1	1	1	1	1	
2M4	チョウ	兆	1	1	1	1	1	
2M4	チョウ	町	1	1	1	1	1	
2M4	チョウ	腸	1	1	1	1	1	
2M4	ドウ	胴	1	1	1	1	1	
2M4	ドウ	堂	1	1	1	1	1	
2M4	ネン	年	1	1	1	1	1	
2M4	ネン	念	1	1	1	1	1,0	㊤～を入れる、御～の入った
2M4	バイ	倍	1,0	1	0,1	1	0,1	
2M4	ハン	判	1	1	1	1	1	
2M4	ハン	版	1	1	1	1	1	
2M4	バン	番	1	1	1	1	1	
2M4	バン	盤	1	1	1	1	1	
2M4	フン	糞	1	1	1	1	1	
2M4	モン	文・紋	1	1	1	1	1	
2M4	ヨウ	癰	1	1	1	1	1	
2M4	ロン	論	1	1	1	1	1	
2M4	シャカ	釈迦	0,1	1	1	0	0,1	
2M4	ミソ	味噌	1	1	1	1	1	
3M1	イコウ	威光	0	0	0	0	0	
3M1	イセイ	威勢	0	0	0	0	0	
3M1	オエツ	嗚咽	0		0		0	
3M1	キゲン	譏謙	0	0	0	0	0	
3M1	キリツ	規律	0,1	0	1,0	0	0	
3M1	キリン	麒麟	0	0	0	0	0	
3M1	キロク	記録	0	0	0	0	0	
3M1	クフウ	工夫	0	0	0	0	0	㊤～する
3M1	ケゴン	華嚴	0		0			
3M1	コクウ	虚空	1,2	1	2,1	2	2,1	
3M1	コショウ	故障	0	0	0	0	0	
3M1	ジジョウ	事情	0	0	0	0	0	
3M1	シジン	詩人	0	0,1	0	0,1	0	
3M1	ジセイ	辞世	0	0	0	0	0	
3M1	ジセイ	時世	0,1	0	0	0	1,0	㊤時勢
3M1	シダイ	次第	0		0	0	0	㊤～を立てる

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
3M1	ジダイ	時代	0	1,0	0	0,1	0	
3M1	シャリン	車輪	0	0	0	0	0	
3M1	シュギョウ	修行	0	0	0	0	0	㊤修業とも㊤～する㊤修業
3M1	シュジョウ	衆生	0,1	0	0,1	0	0,1	
3M1	ジョチュウ	女中	0	0	0	0	0	
3M1	ショニチ	初日	0	0	0	0	0	
3M1	ニョシヨウ	女性	0		0	0	0	㊤女生
3M1	ニョライ	如来	0,1	0	0,1	0	0,1	
3M1	バシヨウ	芭蕉	0	0	0		0	㊤人も㊤植物,人
3M1	ヒミツ	秘密	0	0	0	0	0	
3M1	フソク	不足	0	0	0	0	0	
3M1	マホウ	魔法	0	0	0	0	0	
3M1	ミケン	眉間	0	0	0	0	0	
3M1	ミジン	微塵	0	0	0	0	0	
3M1	ムゴン	無言	0	0	0	0	0	
3M1	ムシン	無心	0	0	0	0	0	
3M1	ムヘン	無辺	0		1,0	1		㊤廣大～の
3M1	モヨウ	模様	0	0	0	0	0	
3M1	リキュウ	離宮	0	0	0	0	0	
3M1	リクツ	理屈	0	0	0	0	0	
3M1	インキョ	隠居	0	0	0	0	0	
3M1	エンリョ	遠慮	0/1	0	0/1	0	0	㊤～がある0,深謀～1㊤ひかへめ0,将来についての考1㊤～する
3M1	ザイショ	在所	3,0	0	3,0	3		
3M1	サクヤ	昨夜	2,0	0	2	0	2,0	
3M1	ザンゲ	懺悔	3,1	0,3	3,1	0,3	1,0	
3M1	ショウジ	障子	0	0	0	0	0	
3M1	ダルマ	達磨	0	0	0	0	0	
3M1	チョウシ	調子	0	0	0	0	0	
3M1	ナイショ	内証	3	3	3,0	3	0,3	㊤ナイショー0,3
3M1	ハウジ	法事	0	0	0	0	0	
3M1	メイド	冥土	0	0	0,1	1	0	㊤冥途
3M1	リクチ	陸地	0	0	0	0	0	
3M4	ゴヒャク	五百	3				3	㊤名詞的,～もある
3M4	シガツ	四月	3,0	3		3	0	㊤副詞的0
3M4	シコク	四国	2	2	3		2	
3M4	ジゴク	地獄	3	3	3	3	0	

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
3M4	ニガツ	二月	3	3	3	3	3	
3M4	ニヒャク	二百	3				3	㊤名詞的, ~もある
3M4	アイソ	愛想	3	3	3	3	3	
3M4	イチド	一度	0	0	3	0	3	㊤一遍, ~読む㊤副詞
3M4	ギョウジ	行事	1,3		1	3	1,3	
3M4	ギョウジャ	行者	3,1	3	3,0	3	0,1	
3M4	ケンギ	嫌疑	1,3	3	3,1	1,3	1,0	
3M4	サイク	細工	3,0	3	3,0	3	0,3	㊤~をする
3M4	ジョウズ	上手	3	3	3	3	3	
3M4	シンジャ	信者	1,3	0	1,3	0,1,3	1	
3M4	ゾウサ	造作	0,3	0	3,0	0	0	㊤ゾウサモナイ 5㊤~もない
3M4	ダイジ	大事	3	3	3,1	3	3,1	㊤大切, ~を取る ㊤大切の意で ~にする㊤大切 3㊤大切な 3㊤大切の意は3
3M4	ドウグ	道具	3	3	3	3	0	
3M4	トウフ	豆腐	3, 新0	0	3	3	0,3	
3M4	ドウリ	道理	3	3	3,1	3	3	
3M4	ドクケ	毒気	0,3		3		3	㊤ドッキ 0㊤ド ツケ, ドクケ
3M4	ナンギ	難儀	3	3	3,0	3	3	㊤ゴナンギ 2㊤ ~だ
3M4	ホック	発句	3,0	3	3,0	3	3,0	
3M4	リチギ	律儀	3,1,0	1	3,0	3	1,3	㊤~な
3M5a	ガテン	合点	2,1	2	2,1	2	2,1	㊤~する [時]
3M5a	ゴジュウ	五十	2	2			2	㊤名詞的 2, 副詞 的 0㊤五十数え る 0
3M5a	ザゼン	座禅	2,0	2	2	1,2	0,2	
3M5a	サトウ	砂糖	2	2	2	2	2	㊤砂糖とも
3M5a	シジュウ	四十	2	2		2	2	㊤名詞的 2, 副詞 的 0㊤四十数え る 0
3M5a	シホウ	四方	2,1	2,1	2	2	1,2	
3M5a	ジュウ	自由	2	2	2	2	2	
3M5a	セカイ	世界	1,2	2,1	1,2	1,2	1,2	
3M5a	ドヨウ	土用	2,0	2	2,0	0,2	0,2	㊤~の丑の日

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
3M5a	ニホン	日本	2	2	2	0	2	
3M5a	ニマン	二万	2				2	
3M5a	ヒガン	彼岸	2,0	0	2	2	0,2	
3M5a	フコウ	不孝	2	2	2	2	2	
3M5a	アクム	悪夢	1	2	1,2	1,2	1	
3M5a	カクゴ	覚悟	2,1	2	2,1	2	1,2	㊦～する
3M5a	シチジ	七時	2	2			2	
3M5a	チツジヨ	秩序	2	2	2	2	1,2	
3M5a	ニチャ	日夜	1,2	0	2,1	1	1,2	
3M5a	ロクジ	六字						
3M5b	クガツ	九月	1	1	1	1	1	
3M5b	クヨウ	供養	1	1	1	1	1	㊦～する
3M5b	クロウ	苦勞	1	1	1	1	1	
3M5b	ゴガツ	五月	1	1	1		1	
3M5b	ゴシキ	五色	0,1	0	0,1	0	1,0	
3M5b	ゴシヨウ	後生	1	1	1	1	1	㊦～が良い,～だから㊦～だから
3M5b	ゴテン	御殿	1	1	1	1	1	
3M5b	ショモツ	書物	1	1	1	1	1	
3M5b	セケン	世間	1	1	1	1	1	㊦セケンサマ 1
3M5b	ミカン	蜜柑	1	1	1	1	1	
3M5b	ケイコ	稽古	1	1	1	1	1	
3M5b	サイド	濟度	1		1	1		㊦～する
3M5b	ザクロ	柘榴	1	1	1	1	1	㊦ジャクロ
3M5b	ショウブ	勝負	1	1	1	1	1	
3M5b	シンカ	臣下	1	1	1	1	1	
3M5b	ダイク	大工	1	1	1	1	1	
3M5b	ダイシ	大師	1	1	1	1	1	
3M5b	ダイジ	大地	1	1	1	1	1	㊦ダイチ㊦ダイチとも㊦ダイチ
3M5b	タンバ	丹波	1	1	1		1	
3M5b	トウジ	当時	1	1	1	1	1	
3M5b	ドクジャ	毒蛇	1	1	1	1	1	㊦～の口
3M5b	ニオク	二億					1	
3M5b	マツロ	末路	1	1	1	1	1	
3M5b	モンコ	門戸	1	1	1	1	1	
3M5b	ヤクシ	薬師	1		1	1	1	
3M5b	ユウキ	勇氣	1	1	1	1	1	
3M5b	ユウジヨ	遊女	1	1		1	1	
3M5b	ユウヨ	猶予	1	1	1		1	
3M5b	リキシ	力士	1,0	0	1,0	0	1,0	

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
3M5b	リュウコ	竜虎	1		1	1	1	
3M6a	ゴゼン	御前	0,1	0	1	0		
3M6a	ニダイ	二代	1	1		1		
3M6a	ニネン	二年	1	1		1	1	
3M6a	ニハイ	二杯	1				1	㊤一杯、～
3M6a	ニバン	二番	1	1	1	1	1	
3M6a	ニマイ	二枚	1	1		1	1	
3M6a	ブレイ	無礼	1	1	1	1	1	
3M6a	アンイ	安易	1	1	1	1	1	㊤～な
3M6a	アンチ	安置	0,1	1,0	1	0,1	0,1	㊤～する
3M6a	カンショ	甘藷	1	1	1	1	1	㊤甘藷㊥甘薯・甘藷（さつまいも） ㊤甘蔗（カンシヨ・カンシヤ）
3M6a	ショウブ	菖蒲	1	1	1	1	1	
3M6a	シンジュ	真珠	0	1	1,0	0	0	
3M6a	ゾウカ	増加	0,1	0,1	0	0,1	0,1	㊤～する
3M6a	ダイゴ	醍醐	1		1			
3M6a	ドウジ	同時	1,0	0	1,0	0	0,1	㊤～に
3M6a	ニウワ	柔和	0		1,0	0	0	㊤～な
3M6a	ボンブ	凡夫	1,0	0	1	0	1,0	
3M6a	モンジュ	文殊	0		0,1	0		㊤～の知恵㊤～の知恵㊥～の知恵 0
3M6a	ヨウチ	幼稚	1,0	1	1,0	1	0,1	㊤～な
3M6b	キキョウ	桔梗	0	0	0	0	0	
3M6b	チャワン	茶碗	0	0	0	0	0	
3M6b	ニカイ	二階	0	0	0	0	0	
3M6b	ニジュウ	二重	0	0	0	0	0	㊤～の
3M6b	ニジョウ	二乗	0		0		0	㊤数学
3M6b	アンマ	按摩	0	0	0	0	0	㊤～をする
3M6b	エンギ	縁起	0	0	0,3	0	0	㊤～が良い㊤お寺の～、インギ（～をかつぐ）
3M6b	カンジ	漢字	0	0	0	0	0	
3M6b	サイショ	最初	0	0	0	0	0	
3M6b	サンシュ	三種						
3M6b	ジョウブ	丈夫	0	0	0	0	0	㊤壮健、強固㊤～な
3M6b	ソウジ	掃除	0	0	0	0,1	0	
3M6b	タイコ	太鼓	0	0	0	1	0	

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
3M6b	ダイジ	題字	0		0	0	0	
3M6b	ダンカ	檀家	0	0	0	0	0	
3M6b	ダンナ	檀那	0	0	0	0	0	
3M6b	ハッカ	薄荷	0	0	0	0	0	
3M6b	ヒキヤク	飛脚	0	0	0	0	0	
3M6b	ヒョウソ	療疽	0		1	0	0	㊦ヒョーソー㊧ ヒョーソー
3M6b	ビョウブ	屏風	0	0	0	0	0	
3M6b	ハイキ	平気	0	0	0	0	0	
3M6b	ヨウキ	陽気	0	0	0	0	0	㊦～が良い,～な 人㊧～な
3M6b	ヨウジ	楊枝	0	0	0	0	0	
3M6b	レンゲ	蓮華	0	0	0	0	0	㊦ [花], [器]
3M7	オウイ	王位	1		1	1	1	
3M7	オウウ	奥羽	1	1		1	1	
3M7	オウジ	王子	1	1	1	1	1	
3M7	オウジャ	王者	1		1	1	1	㊦おおしゃ㊧陸 の～
3M7	キンジョ	近所	1	1	1,0	1	1	
3M7	グンジ	軍事	1	1	1	1	1	
3M7	ケンゴ	堅固	1	1	1	1	1	㊦～な
3M7	コンゴ	今後	1,0	1,0	1,0	0	1,0	㊦ [副]
3M7	コンジ	今時			1			
3M7	コンド	今度	1	1	1	1	1	
3M7	コンブ	昆布	1	1	1	1	1	
3M7	コンヤ	今夜	1	1	1	1	1	
3M7	サイゴ	最後	1	1	1	1	1	㊦～の
3M7	サンド	三度	1	1		1		
3M7	サンミ	三位	1		1	1		㊦三位一体1
3M7	サンリ	三里	1/0		1/0	1	1	㊦距離1, 灸0㊧ 距離1, 灸0㊨灸 1㊩灸1
3M7	ショウカ	唱歌	1	1	1	1	1	
3M7	シンリ	真理	1	1	1	1	1	㊦眞理
3M7	セイギ	正義	1	1	1	1	1	
3M7	センジ	千字						
3M7	センド	先途	1	1	1,0	1	1	㊦ここを～と戦 ふ㊧ここを～と
3M7	センヤ	千夜				1		
3M7	センリ	千里	1		1	1	1	
3M7	タンゴ	端午	1	1	1	1	1	㊦～の節句

表7：漢語アクセント類別語彙（奥村）・辞書5種対照表

類	語	漢字	A	B	C	D	E	備考
3M7	タンゴ	丹後			1		1	
3M7	トウジ	東寺	1	1		0		
3M7	ニンブ	人夫	1	1	1	1	1	
3M7	パンリ	万里	1	1	1	1	1	㊤～の長城㊦萬里長城
3M7	ブンゴ	豊後	1	1			1	
3M7	ヘンチ	辺地			1		1	
3M7	ボウズ	坊主	1	1	1	1	1	㊤房主とも
3M7	ミョウジ	苗字	1	1	1	1	1	㊤～帯刀
3M7	ヨウイ	用意	1	1	1	1	1	㊤～する
3M7	ライセ	来世	1,0	1	1,0	1	1,0	
3M7	ロンゴ	論語	1	1		1	1,0	

各語のア型を方言間対応や文献資料などから検証することは稿を改めて論ずるとして、本稿では東京式アクセントに限り、気がついたことを記しておく。

意味の派生、名詞と品詞の別といった事情から、同音形でありながらア型を異にする場合は、派生関係によっていずれかが伝統型と考えることができそうであるが、これも個別に考える必要がある（1M1「^{ショ}・^リ理」、2M1「^{キョク}・^{コフ}骨・^{ボン}・^{レイ}礼」、2M3「^{カク}」、2M4「^{ダイ}」、3M1「^{エン}・^{リョ}慮」、3M5a「^ゴ・^{ジュウ}・^シ・^{ジュウ}四十」）。

その他、辞書記載のア型を見る限り、認定について一考を要すると思われるものもあった。

1M1「^イ意」、^イ「威」は1型が優位にも見える。辞書Dの0型を重く見ることは可能かどうか。辞書Aにおける「^ク九」、^ゴ「五」などのように「1, 古0」などの新旧情報が記されるものは、いずれが伝統型として考えられそうか手がかりとなる場合もある。

1M3「^ケ気」は0型も見られる。秋永一枝1996では方言間対応を根拠に1型を伝統型と見ている。「^ザ座」も0型が目立つ。

2M1「^{セキ}席」は0型が新しいとすれば1類相当にそぐわない。美妙『日本大辞書』では「第二上」である。

2M2「^イ・^ミ意味」も1型が優位で辞書Bの2型を伝統とみることに不安がないではない。

2M3「^{アク}・^{カツ}悪・活」も1型が優位である。美妙『日本大辞書』では「^{アク}悪」は「第二上」である。「^{サク}柵」、^{サク}「^{ジュク}塾」も1型が優位である。

3M1「^{コクウ}虚空」も1型と2型で揺れており、伝統型を0型と推定するには合わない。美妙『日本大辞書』では「第二上」である。同「^{ザイショ}・^{ザンゲ}・^{ナイショ}在所・懺悔・内証」も1型や3型が優位で0型とみなすことは疑問である。「^{サク}・^ヤ昨夜」も2型が多く現われることが目に付く。美妙『日本大辞書』では「在所」は「第三、四上」、「懺悔」はサンゲ「全平、又、第三上」ザンゲ「第三上」、「内証」はナイショウ「第三、

四上]とある。

3M4「^{シコク}四国」は2型が優位である。美妙『日本大辞書』では「第三上」とある。「^{イチド}一度」は0型が目立つが、副詞的な発音を記載したか。

3M5a「^{セカイ}世界」は辞書Bのみ2型を優位とし、他は1型が優位である。3M5b「^{ゴシキ}五色」「^{リキシ}力士」は0型との間で揺れる。

3M6aは1+2構造で「^{ゴゼン}御前」、2+1構造では「^{アンチ}安置」以下多数の語が0型との間で揺れる。多数型への類推が関与するか。これに対し、3M6bは0型で安定するものが（奥村によって）分類されている。

上記、認定に関わって問題となりそうな箇所のみ個別的に指摘するにとどめる。

6 結論と課題

本稿では奥村による「漢語アクセント類別語彙」を検証することを目的として、奥村が東京式アクセントのよりどころとした5種の辞書のデータベースを作成し、そのA型の分布を拍数・拍構造別に概観した。各辞書からは概ね先行研究と同様の分布傾向が見て取れたが、辞書間の揺れもまた大きく、それらのいくつかは母音の無声化現象から解釈可能であったものの、辞書の個別的な性格としか呼びよえない傾向も認められた。こうした揺れは「漢語アクセント類別語彙」の認定に少なからず影響を与えるはずである。事実、奥村の認定と5種の辞書を対照させると、辞書を根拠とするだけでは京都市アクセントや鹿児島式アクセントと整合的な対応関係にあるとは言えないものも散見することが分かった。1拍・2拍の漢語が大きく1型に合流し、3拍漢語1+2構造の語が0型へ、2+1構造の語が1型へ合流していくなかで、辞書に記載されたA型がどの程度伝統を反映するかという大きな問題も改めて検討する必要があるだろう。

知識音としての漢語アクセントが和語と同様の方言間対応するとは限らないことは言うまでもないことだが、しかし、奥村の言うような「由緒深い漢語」に限って言えば対応関係が見られることは疑いを入れないことであろう。奥村の認定プロセスを精緻に辿り、より整合的な認定を試みることで漢語アクセントの歴史を検討していくことが望まれる。

また本稿では5種の辞書の間揺れを概観することに主要な目的の一つが置かれたため、音節構造による分析などはほぼ手つかずのままであった。今後の課題としたい。

参考文献

- 相澤正夫 1992「進行中のアクセント変化—東京語の複合動詞の場合—」研究報告集13
 _____ 1996「語の長さアクセント変化—『東京語アクセント資料』の分析—」研究報告集17
 秋永一枝 1985「標準アクセントと東京アクセント」講座日本語教育21
 _____ 1996「東京弁における「気」のアクセント（特集「気」の語句）」日本語学15-7（秋永一枝1999『東

京弁アクセントの変容』所収「VIII 字音一字語のアクセント」)

秋永一枝・坂本清恵 2010 『(新) 明解日本語アクセント辞典』からの報告』アクセント史資料索引別冊；5 ア
クセント史資料研究会

上野和昭 2011 『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』早稲田大学出版部

奥村三雄 1961 「漢語のアクセント」国語国文30-1

_____ 1963 「漢語のアクセント—アクセントから語彙論へ—」国語学55

_____ 1974 「諸方言アクセント分派の時期—語アクセントの研究—」広島方言研究所紀要方言研究叢書3

加藤大鶴 2018 『漢語アクセント形成史論』笠間書院

_____ 2019 「1字漢語のアクセント：漢語の類別語彙を考えるために」論集14

金田一春彦 1937 「現代諸方言の比較から見た平安朝アクセント—特に二音節名詞に就て—」方言2 (『金田一春
彦著作集9』玉川大学出版会, 2005に所収)

_____ 1954 「東西両アクセントのちがいが出来るまで」文学22-8 (『金田一春彦著作集7』玉川大学出版会,
2005に所収)

_____ 1973 「二つのアクセント辞典を」放送文化28-12『金田一春彦著作集11』玉川大学出版会, 2011に所収

_____ 1980 「味噌よりは新しく茶よりは古い—アクセントから見た日本祖語と字音語—(上)」月刊言語9-
4 (『金田一春彦著作集7』玉川大学出版会, 2005に所収)

桜井茂治 1957 「『出合』考—アクセント史的考察」國學院雑誌7 (桜井茂治1977『新義真言宗伝『補忘記』の国
語学的研究』桜楓社に所収)

_____ 1959 「漢語アクセントの国語化—主として「出合」以前について」國學院雑誌60-9 (桜井茂治1977『新
義真言宗伝『補忘記』の国語学的研究』桜楓社に所収)

_____ 1994 「『出合』アクセント史論」佐藤喜代治(編)『国語論究第5集 中世語の研究』明治書院

佐藤亮一 1990 「現代東京語のアクセント—年齢差および辞典との差を中心に—」佐藤喜代治(編)『国語論究第
2集 文字・音韻の研究』明治書院

塩田雄大 2016 「NHK アクセント辞典”新辞典”への大改訂(6) 漢語のアクセントの現況：変化の「背景」を
探る」放送研究と調査66-12

三井はるみ 1986 「東京語における3拍漢語のアクセント変化」国語学研究26

*本研究は「東京式アクセントにおける漢語アクセントの基礎データの構築」(平成31年度 跡見
学園女子大学 特別研究助成費)の成果の一部である。